

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370403

研究課題名(和文) 現代中国における審美主義とデカダンスのスタイル

研究課題名(英文) Modern Chinese Aestheticism and the Style of Decadence

研究代表者

伊藤 徳也 (ITO, Noriya)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10213068

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：周作人を代表とする現代中国学院派の審美主義は、真・善・美のバランスを重んじる古典主義美学を踏まえたものだった。それは、近代に入って以降、ある程度デカダンスを許容するようになり、商業主義が進んだ1990年代以降も残存し続けた。現代中国における「デカダンスのスタイル」は1980年代以降文芸形式において様々な形態で表現され、古典主義美学を揺さぶった。

研究成果の概要(英文)：Modern Chinese Aestheticism that was mainly constituted by Zhou Zuoren and other Chinese critics has valued the balance of "truth, goodness and beauty". So, we can say it was a sort of classic aesthetics. In modern times, It has positively accepted "decadence" to some extent and survived even after 1990's. Many decadent works in China were started to present after "Great Cultural Revolution" and shake the Chinese classic aesthetics.

研究分野：近現代中国文学

キーワード：審美主義 現代中国 周作人 中国文学 比較文学

## 1. 研究開始当初の背景

前回の研究プロジェクト「現代中国における審美主義」(2008-10年・基盤C)では、主に1920年代から30年代にかけての文人・作家の審美主義を考察した。

その中でも、周作人のモダニティの諸形式に対する態度と試みは、モダニティの問題に対して、中国人として極めて先端的かつ総合的に答えようとしたものであったことを解明した。

特に興味深かったのは、H・エリス等から啓発された周作人の類廃論であった。彼らの用語“類廃”“decadence”は、通常の意味とは違って、いわば「部分の全体化」、部分の全体に対する優位、過程の結果に対する優位、傍流の主流に対する優位、周縁の中心に対する優位を意味した。

そしてそれは、広義の芸術“ars”から狭義の芸術“fine arts”への狭隘化そして、真・善・美それぞれへの追求を深化させた「科学」「道徳」「芸術」への三分化を一面からとらえた観念でもあった。それは結局のところ、近代化(“modernization”)そのものをも指した。

今回のプロジェクトでは、以上の結果を踏まえて、近百年來の中国における審美関係とモダニティの諸形式に対する態度及び創造的芸術活動はどのようになってきているのかを、前回プロジェクトよりももう少し考察範囲を広げて、具体的な様相を概観してみたいと考えた。

## 2. 研究の目的

周作人をはじめとして、古典主義的な美学を奉じていた文人・作家は少なくなかったが、林語堂のように、商業主義社会を巧妙に利用して、中国古典主義美学を通俗化した者がいた。その後文革を挟んで1980年代以降、古典主義的な美学はどのようになったのか。それを解明することが本研究の目的であった。焦点としては、

(1) 政治権力と同等かそれ以上に芸術の自律性を脅かす商業主義に対して、エリート・文芸者がどのような態度を取り、どのような審美関係を構築しようとしたか。

(2) 倫理的奥行きや繊細さを欠く大衆が審美主体となる、流動的で多発的な審美関係の社会的な生起と変動(その中にエリート・文芸者も埋没する)がいかなるものだったのか。

(3) 商業的消費中心の「生活の芸術化」の社会的傾向は、今後のモダニティの諸形式の形成、変動にどれほどの影響を及ぼしているのか。

(4) 審美関係の中に働くデカダンス(部分、細部の細密描写)と物語(イデオロギー、脱現実性、演劇性)に関する価値観、評価基準はどのような関係で、またどのような傾向を持つのか。

等が焦点であった。本プロジェクトは、芸術の自律性に対する内面的な理解に基づいて、審美関係の社会的な様相と、「グローバル・ポストモダン」(M・フェザーストーン)の新しい時代的趨勢を、中国という空間において捉えようとしたものである。

## 3. 研究の方法

作品(文字テキストと映像テキスト)に対する実証主義的なテキスト分析が主要な方法であった。基礎的なテキスト・クリティックは当然行った。相対的に基本テキストが整備されたと言えるようなものでも、当然多くの問題点は存在しているので、さらに精密な検討を加えた。

歴史的な動きや傾向をとらえるために最も有効だったのは、インター・テクスチュアリティ(作品と作品との影響関係)の解明であった。文学、芸術活動を支える社会的システムに対する検討においては、作品そのもの以外に、様々なメディア関連の法令や年鑑、報告書などを参照したが、基本的には文献学の方法による。同時期の社会に対する初歩的な観察は行ったが、それはあくまでも補足的に行った。

## 4. 研究成果

周作人を代表とする現代中国学院派の審美主義は、真・善・美のバランスを重んじる古典主義美学を踏まえつつも、積極的にデカダンスを受け入れていく方向性にあった。いわゆる京派の作家・文人たちは、必ずしもアカデミズムの中で研究活動を行わない者もいたが、おおまかに言って、学院派同様の態度を持っていたと言ってよい。

例えば、馮至などは若干デカダンスを強めに表出した白話詩「蛇」を発表して有名だが、基本的には古典主義的な美学に拠っていたと言えよう。

しかしながら、周作人本人は、ヨーロッパの「デカダンスのスタイル」を採用しなくなるとともに、若い作家のデカダンスを擁護育成する立場へと移っていった。若い作家の代表的な存在としては、廃名、李金髮に対する援助がある。

本研究においては、そんな過程の中にあつた彼自身の重要な活動(日本語で執筆したテキスト)を発掘し、混乱していたテキストクリティックや用語の分析において、新たな学問的貢献を行った。たとえば、

(1) 戦前北京で日本人が発行していた日

本語誌『北京週報』第69号(1923年6月17日)掲載の「支那文壇無駄話」(署名:北斗生)が実は、周作人が日本語で書いた文章であることを明らかにした。

(2) 周作人が中国語の文章の中で使用していた“人間”という語彙が、日本語からの借用である場合(“人間”=“人”の場合)とそうでない場合(“人間”=“世間”“人の世”)があることを明らかにした。ただし、いずれの意味に解釈できる用例も多い。また、彼が日本語の“人間”を中国語に翻訳する際、“人”にするのか“人間”にするのかは、かなりコンテキストに依拠しており、臨機応変に対処していた。その対処の仕方の一部を解明した。

(3) “modernity”という英語が北米においては“globalization”とほぼ同じような意味で使用されることを指摘した。

(4) 1923年5月28日に世界的バイオリニストであったフリッツ・クライスラーが北京で中国人向けの公演を行ったが、その直前に徐志摩が『晨报』(1923年5月18日)に、クライスラーを北京へ呼ぶための資金提供を呼び掛けている。その文章は従来徐志摩の文章とは考えられていなかったが、それが徐志摩の文章であることを明らかにした。

(5) クライスラーが北京で公演をした際の状況は、ルイス・P・ロックナーが著書『フリッツ・クライスラー』に記録しているが、彼に北京公演をするよう強く依頼したのは、若い中国人、としか記されていないが、それが、徐志摩であったことを解明した。

さて、その後、戦時中から文革まで否定あるいは徹底的に抑圧された審美主義は、1980年代以降復活し、それは主に美学者によって先導されたと考えられるが、朱光潜にせよ李沢厚にせよ、真・善・美のバランスは常に重視されていたと考えられる。しかし、実作の方では、明確に「デカダンスのスタイル」を打ち出した作品がいくつも現れた。

例えば、文革直後の徐遲「ゴールドバッハの予想」や劉索拉「君に他の選択はない」がその代表で、それぞれ、「真」あるいは「美」の追求を他の二つの追求よりも明確に優先させた人物像を描き、論議を呼んだ。その振り切り方は、明らかに周作人のデカダンス論のレベルを超えていた。

また、莫言は、1980年代半ば以降に、「デカダンスのスタイル」を駆使して、従来の硬直した歴史観や中国観を揺さぶるような作品群を次々と発表した。その意味でも『紅高粱家族』は代表作と言える。ところがそれらの作品や作家の方向性、作品の特筆を、「デ

カダンスのスタイル」とみなし、読み解き、解説した分析はこれまで存在していない。この点については、新しい研究の端緒をつかんだという手ごたえはある。しかしながら、それだけにとどまり、論文など成果としては著すことができなかった。

さて、古典的な審美主義は、文革終了後、様々な「デカダンスのスタイル」の出現によって常に揺さぶられてきたが、商業主義が進んだ1990年代降も根強く残存し続けた。1990年代半ばまでは、まだ、前半の「人文精神」討論などの影響が残る状態だったが、90年代後半になると、文学やカルチャーを支える各種の社会システムが一斉に商業主義へと舵を切った。

そのころから1990年代末、正規の変わり目あたりにかけて出現して大きな反響を呼んだ1970年代生まれの所謂「美女作家」達(衛慧を代表とする)の作品とパフォーマンス及び彼女らを取り囲む文壇の状況は、「中国現代文学の終焉」(尾崎文昭)を予感させるほど古典主義的な審美主義を大きく揺さぶった。彼女たちの創作の現場では、社会主義や「ポリティカル・コレクトネス」や思想的中庸よりも、明らかに、センセーショナルな描写や大衆の嗜好性が重んじられた。

その時期は、80年代生まれのいわゆる“80後”作家が頭角を現してきた時期でもあり、“80後”作家が注目されるにつれ、一方で、60年代生まれや70年代生まれの作家に対する関心も次々に生まれた。

「美女作家」の中にも70年代生まれがいたが、メディアにおいてあまりに刺激的な存在だったため、いわゆる“70後”作家とは別に論じられることが多かった。

また、60年代生まれ作家として知られる作家には80年代半ばに出現したいわゆる“先鋒派”(前衛派)作家がいる。例えば、余華、格非、蘇童だが、90年代後半以降に注目されるようになった“60後”作家は、いわば、“先鋒派”のような80年代半ばのデヴューに間に合わずに、89年の六四天安門事件が起こってしまい、商業主義社会が本格的に到来する90年代後半まで、世に出ることができなかった世代として考えることができる(王曉漁講演)。

しかし、やはり、同じ60年代生まれの作家としての共通性は確かにあるので、従来の分類に縛られずにそれぞれの作家の知的背景社会的経験などを個別に確認していくことが重要である。そこには、劉震雲なども含めて考えるべきだろう。

やはり同じ時期頃から1950年代生まれの閻連科の郷土文学が強烈な存在感を放つようになった。文学作品の内容的深刻さやスケールの大きさに関しては、閻連科の他にも、賈平凹やノーベル文学賞を採った莫言の書く郷土文学作品が、他の作品を圧倒していたように私には見える。多くの研究や評論の傾

向を見ても、私の印象は間違っていないと思われる。

閻連科のやや土大夫的で現実志向的態度や、前衛派から社会派へと転身を遂げた 60 年代生まれの余華の姿勢、“80 後”作家の中の韓寒の強い社会批評性などは、古典的な審美主義がまだまだ頑強な生命力を維持していることを窺わせる。実際、中国大陸の学者の観点や意見も、最も根本的なところでは、古典主義的なバランスを重視しているようである。(意見交換や文章を読んだ印象からそう判断してもよいと思われる)

ただし、閻連科の猛烈な中国リアリズム批判とその表現としての作品群(特に『受活』以降)は、社会主義リアリズム以来の硬直した古典主義形式を突き崩そうとする一種の「デカダンスのスタイル」でもあるという点が、今後、本研究を発展させるうえで、重要なポイントになりうるのではないかと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15 件)

伊藤徳也、周作人における“人間”とその多義性 日本語との関わりについて、『野草』、査読有、第 98 号、2016 年、p.4-18

坂井洋史、《随想録》的叙述策略和魅力—2016 年 4 月 30 日在上海図書館的演講、現代中文学刊、査読無、43 号、2016 年、p.4-11,26

坂井洋史、日本最早的巴金作品翻譯及介紹、點滴、査読無、44 号 2016 年、50-56 頁

佐藤普美子、美感與倫理相遇的地方:馮至的「交往」境界,台灣「中國現代文學」,査読有、第 27 期,2015 年、p.151-166

坂井洋史、一九二四年三月中華学芸社第一屆年会における郭沫若の講演を巡って、郭沫若研究会報、査読無、15、2015 年、7-10 頁

伊藤徳也、「頹廢派」と「生への意志」との関係、『周作人研究通信』、査読無、第 2 号、2014 年、p.1-9

伊藤徳也、《新文學的三大潮流》は如何

に書かれ如何に発表されたか、『周作人研究通信』、査読無、第 2 号、2014 年、p.18-20

伊藤徳也、周作人の文弱性、『周作人研究通信』、査読無、第 1 号、2014 年、p.1-5

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

伊藤 徳也 (ITO, Noriya)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号：10213068

##### (2) 連携研究者

佐藤 普美子 (SATO, Fumiko)  
駒澤大学・総合研究教育部・教授  
研究者番号：60119427

坂井 洋史 (Sakai, Hirobumi)  
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授  
研究者番号：80196047